INTERVIEW：インタビュー

『文藝春秋』新編集長

新谷 学さん

文春砲で有名な『週刊文春』の編集長だった新谷学さんが，2021年7月に月刊『文藝春秋』の新編集長となりました。週刊誌での文春砲なる命名は実は本意ではないとのことで，月刊『文藝春秋』では「砲」で叩くのではなく，論壇を再構築したいと抱負を語られます。また，新しいデジタル戦略にも怠りがないとお見受けしました。

剛腕編集長を据えて100周年を迎える国民雑誌の今後を，読者はたのしみにしています。

聞き手・構成：味岡 康子

今につながる日々

── 小学校2年生のとき，『きかんしゃやえもん』の感想文に，そもそも機関車が話せるわけないと1文だけ出したという逸話は本当ですか。

本当です。何故皆と同じように書けないのかと母親が担任に呼び出されました。

── お育ちになった八王子の思い出は？

中学校の野球部で1つ上の先輩だったのが，今，経産大臣をやっている萩生田光一氏。悪くて，怖くて（笑）。声を出せ，気合いを入れろと怒られ。安倍政権時代は批判をするたびに，もういいかげんにしろと抗議電話が来たけど，一切言うことを聞かない。それでも今も関係は続いています。

── 体育会系のマインドがおありだと思いましたが，そこら辺ですかね。

わいわいやりながら，みんなで一生懸命やって盛り上がるみたいな雰囲気がいいですよね。部活，部室の雰囲気がもともと好きですから。

──『週刊文春』での文春砲は有名にはなったものの，必ずしも本意ではないと。

スクープによって『週刊文春』が注目されることは大変ありがたいことですが，文春砲の「砲」は，大砲の「砲」。もともと相手をやっつけたり，相手の人生をめちゃくちゃにしようというモチベーションで仕事をしているわけではないので，怖がられるよりも愛されるメディアでありたいと思っています。

建設的な発信と新たな論壇形成

── 100周年を迎える『文藝春秋』は，国民雑誌であり，良質な中庸というイメージがありますが，『文藝春秋』をどのようにしたいと。

スクラップ＆ビルドで言うと，『週刊文春』だと批判的に，だめだ，だめだというスタンスが多いですが，『文藝春秋』ではだめなのは分かったが，ではどうすれば政府も官界も財界もよくなるかという建設的な発信をもっともっと心掛けたいと。

2021年11月号では，財務省の矢野事務次官に「このままだと国家財政は破綻する」という問題提起をしてもらいました。これはまさに私の方針の現れ。コロナ対策，経済対策を打つことは大事ですが，そもそも財源にもきちっと目配りする必要があるという問題提起をして，賛否両論がありましたが，提起する意味は非常に大きかったと思います。

また，今の時代はインターネットが進んで，SNSが発達することによって，声が大きい人の発言が実態以上に大きく響いたり伝わったりする。そうなるとサイレントマジョリティーとしっかり向き合っていくことが，これまで以上に大切です。

――『文藝春秋』において論壇を新しく形成したいとも。

特に保守の論壇ですね。まっとうな保守とは本来そんなに過激なものではない。もっと穏やかで，さっき申し上げたサイレントマジョリティーをしっかりとすくい上げていくものが保守だと思いますが，なにか非常に攻撃的な，排他的なものが保守だとなっているので，まともな保守論壇をもう1回ちゃんと創れるといいなと思っていますけどね。

―― 論壇形成には新しい論者も登場してくると思いますが，例えば左でも右でも，どういう方をイメージされていますか。

私が読んで興味深かったのは，『人新世の「資本論」』の斎藤幸平さん。よく売れて大ベストセラーになりました。売れるものには必ず理由がある。あらためて資本論を，エコを入れた資本論だけれども，受け入れる土壌が今，この国あるいは世界的にもあるのだろうと感じて，私もいい刺激をいただいた。

―― そうすると，それに対抗するような右の新しい論客の候補は？

私はもともと論壇とのお付き合いはあまりないんですが，2021年11月号で，菅首相退陣を受けて，與那覇潤さんに「口下手は災いの元か」を書いてもらった。これは非常にいい原稿だと思います。

象徴天皇制の今後

―― 右の論壇の方は皇室との関係がデリケートですね。皇室といえば，新谷さんは政治と皇室の主導権争いそのものが日本の歴史だと。

昔から政治権力による天皇の奪い合いがずっと繰り返されてきた歴史だと思います。

ただ，今一番危惧するのは，戦後，初めて出来上がったいわゆる象徴天皇制，それが大きなピンチに立たされている。天皇は人間宣言をしたけれど，基本的人権がどこまであるのかを，詰めてルール設計していない。その地位は日本国民の総意に基づくというまさに人気によるような，すごくあやふやなところに寄って立っている。

この間，読んだ宇野重規さんの『保守主義とは何か』では，保守思想の父エドマンド・バークの言葉が出ていて，フランス革命においてバークが，国民的な人気のような不安定なものの上に王室を立脚させることは絶対あってはならないと書いているんですが，まさにその通り。

開かれた皇室になると，神格化することはできず，国民の目に広くさらされるので，本当に難しい状況にきたなと思いますね。だから一刻も早く，この象徴天皇制を持続可能なものにしていくための新たなルール作りを始めないと。

――『週刊文春』の2021年10月28日号で「愛子さまが天皇になる日」という特集をしていましたが。

あの特集は，ピンポイントのファクトが何かある

というよりは，今の象徴天皇制が抱える問題を端的に表すタイトルであり，内容だったので，むしろ月刊誌的だなと思いました。

ポリティカルコレクトネスと言論の自由

── ポリティカルコレクトネスについては，どうお考えですか。

何事も極端なのは非常に危険だと思っていて，正義とは非常に危うい概念だと。自分は正義であると言った瞬間に非常に，危うさを孕んでしまう。

── 切り落とすものがありますよね。

そう。ポリティカルコレクトネスは，正しいか，正しくないかという判断基準でいろいろなものを区分けしてしまいますが，そんなきれいに二分できるものではない。自分は正義だ，自分は弱者だと言い始めると，途端にものすごく強者になってしまう。その危うさですよね。

── インターネットの発信について。

今の憲法はインターネットの登場を想定していない。例えば「Yahoo!」で眞子さんご結婚に関して非常にネガティブな意見が書き込まれて炎上すると。そうすると，今度は「Yahoo!」側がコメントを見られないようにする。それに対して自分たちの言論の自由を侵害するのかと声を上げたりする。

インターネットにおける発信は，紙の雑誌，テレビも含めての従来の言論の拡散の仕方とは全然規模も破壊力も違う。新たなルールがまだ確立されてない状況で，言論の自由を叫んだり，それを取り締まろうとする危うさ，あいまいさがある。

とにかく法曹界も含めて，政府も挙げて取り組まないと非常に不幸な出来事，ネットリンチみたいなことがもっともっと起こるのではと，すごく心配しています。

リスペクトする編集長

── リスペクトする編集長を３人挙げると，どなたですか。

一番はやはり菊池寛ですね。

例えば『話』という雑誌が売れなくて困っていたとき，社長の菊池寛が自ら編集部に来て，今日から僕が編集長をやるよと，いきなり巻き紙にプランを書いて，これで作ってみなさいと。作ったら，あっという間に売れるようになった。大衆の関心，好奇心のありかがよく分かっている。

あるいは，多数で１つのテーマを話し合う座談会を初めて考えたのも菊池寛。『文藝春秋』2021年11月号でも「危機のリーダーの条件」座談会をやっています。編集者としてのセンスは圧倒的だと思いますね。

次は『週刊文春』の編集長もされた田中健五さん。調査報道に非常に力を入れた。週刊誌だから何を書いてもいいではなくて，やはりクレディビリティーをしっかり求めた。『文藝春秋』でも調査報道で「田中角栄の金脈研究」に立花隆さんを使って大きな成果を挙げた。報道機関としての可能性を切り開いた編集長だと思います。

もう１人挙げるとすれば，『週刊文春』時代の花田紀凱さんはすごかった。タイトルがうまかったし，リーダーとしても明るくて，花田さんでしか使えないくせ者たちをその気にさせるのがうまかったです。

編集長の要諦とは

── 編集長としての要諦はどんなものでしょうか。

記者がいて，その上に原稿を書く書き手，その上にデスク，その上に編集長という形ですが，事件を追い掛ける特集班のデスクができるかできないかというのが，うちの中では１つ大きなターニング

ポイント。

私は，この人をデスクに上げようかなと思うとき，見ているポイントが3つあって，1つは情報をどのぐらい幅広く集められるのかという情報収集力。2つ目は書く能力。3つ目が統率力。くせ者ぞろいの記者を束ねて，現場で行け，止まれと指示するのは基本的にデスク。そういう統率力，言うことを聞かせる力が必要。

その上で，編集長になると，もう1つすごく大事な力があって，これは売る力ですよね。

いくらスクープを取っても売れないと雑誌はつぶれますから，売る力は大事。さっき菊池寛の話をしましたが，読者のニーズ，あるいは世の中に漂う空気とか温度感を肌感覚で察知して，売れるものを見極める眼力，嗅覚も含めて，そういう力がないと。これを持っている人間は結構少ないので，ここは難しいところですよ。

裁判の勝ち方は負けて覚えた

── お仕事柄，名誉毀損等の訴訟リスクについてはいかがですか。

2012年に『週刊文春』編集長になったとき，かなり攻め込んでアクセルを踏み，記事を出したところ，自分の想像以上に次々に名誉毀損で訴えられました。昔よりも立証のハードルが上がっているなという印象。

何で負けたのかを会社の法務部と顧問弁護士と都度都度ミーティングをしながら，やはり今の時代は匿名証言，伝聞情報だとだめだなとか，実名を出しての証言でも，途中で供述内容がぶれると証拠能力が落ちてしまうとか，何で負けたのかを詰めて穴をふさいでいくことによって，だんだん負けながら闘い方を覚えていきました。

自分が証人尋問に呼ばれたとき，原告側の弁護士や裁判官からいろいろ質問されます。例えばホテルで密会していたと記事を書くと，「じゃあ，ホテル側には聞いたのか」と訊かれ，「いや，ホテル側が答えるわけない」と言うと，「そんな基本的なところも聞いてなくて，裁判官，こんないいかげんな取材をしていますよ」とやられる。「では，この人には聞いたか」「行ったら不在でした」「ならば名刺か手紙は残したか」と。

自分がどういう取材をしてきたのかが，その場で生体解剖，法廷の場でつまびらかにされていくことによって，どこに穴が開いていたのかがよく分かる。

とにかくやれることはすべて尽くす，打てる手はすべて打つことがまず最低限必要だと学びました。負けて，高い授業料を払ってでも，身をもって法廷闘争を経験していくと，これはどこまでいけるか，どこまでアクセルを踏めるか，どこでブレーキを踏むかということが分かってくる。

今の我が社の強さの1つは，そうした知見を積んできたことだと思いますね。

── 依頼者として描く理想的な弁護士とは？

やはり勝たせてくれる弁護士。こちらが言うことに理解を示して寄り添ってくれると，いい弁護士だなと思うけれど，結果的に負けちゃうとやっぱりだめなわけで，そこのジャッジですよね。

私が本気で行くぞとなったときに，羽交い締めで止めてくれる最後のとりでは，法務部よりも社長よりも，やはり顧問弁護士です。

プロフィール　しんたに・まなぶ

1964年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。1989年文藝春秋入社。「Number」「マルコポーロ」編集部，「週刊文春」記者・デスク，月刊「文藝春秋」編集部，ノンフィクション局第一部長，「週刊文春」編集長を経て，2021年7月から「文藝春秋」編集長。